

ラジオ全盛期、「放送詩劇」の分野で活躍した放送作家であり詩人の伊藤海彦(1925-1995)は、NHK専属から後にフリーとなり数々の合唱曲を手がけた。

中田喜直「みえないものを(女声)」「蝶(女声)」、三善晃「道(NHK学校音楽コンクール高校の部課題曲)」、佐藤真「みえない樹(同コンクール高校の部課題曲)」、荻久保和明「季節へのまなざし(混声)」大中恩「遥かなものを(混声)」「走れ、わが心(男声)」そして「島よ(混声のちに男声、女声に編曲)」…。

なぜこれほどまでに<sup>そうそう</sup>錚々たる作曲家に愛されたのか…。

それは、耳からの情報だけで物語を紡ぎ出す「放送詩劇の放送作家」—今風に言えばラジオドラマのシナリオライター—として磨いた技と感性がそこにあることを忘れてはならない。自然界に題材を取りながらも、「生と死」「孤独と連帯」「絶望と再生」など人として誰しもが突き当たる問題を、<sup>選</sup>りすぐられた聴き取りやすい言葉で示唆する作風が、作曲家たちの創造力を大いに刺激したからに違いない。

「島よ」においても、「大海原に浮かぶ孤島」という大きなスケールの自然描写をしつつ、「世間の荒波に揉まれる孤独な人間」の様々な情感を活写し、演奏者にも聴衆にも大きな共感を呼び起こす。

I.

[♪時の波に洗われているものよ] [♪あまたの眼にみつめられているものよ]

…何と人間的な表現だろう。私達はこの冒頭で「島」が私(達)であることに気付くべきなのに。

II.

[♪まぶしさに吹かれながら島は夢みる] …一瞬、希望がちらつく、しかしやはり[♪その孤独から空に向かって][♪なぜ、なぜ、なぜ]と問いかけるしか無いのだ。[♪忘れられた<sup>このみ</sup>果実のように]…。

III.

傷ついた小さな<sup>けもの</sup>獣は[♪まざりあうこの狂気]に[♪失われる自分を]、島はまた再び失う。

IV.

波のはてにマグマの脈打つ鼓動が聴こえてくる…島は[♪忘れていたはるかな<sup>いのち</sup>生命]をきく、それは紛れもない[♪母なる<sup>マグマ</sup>岩漿]の声だ。[♪溢れこみあげほとばしる]生命、そしてやがて[♪島はあたらしくなる]。島は新たに生き始めようと決心するのだ。

V.

やがて、[♪やってくるものの気配]を感じた島は[♪見知らぬ一日が吐息のようにひろがるのを]期待して、待つ。

VI.

しかし、[♪日ごと夜ごとその身をそがれ]ながらも[♪火の<sup>しるし</sup>刻印を守りつづける]おまえ。ああ、おまえはもしかすると[♪私ではないのか][♪人という名の儂ない島]よ!

ああ、やはりおまえは…。

結末は絶望か、それとも希望か。このとき詩人は問うていたはずである。人生は孤独だけれど、夢や希望があり、歌があり、仲間がいるではないか、と。